補章１　どうすれば語彙を蓄積できるか

さて以上で全ての英訳を終わったのですが、いかがだったでしょうか。前章でも述べたとおり、英語の基本型さえ守っていれば、異本的には通じる英語になることがお分かりいただけたことと思います。

これまでの章で何度も確認したように、私たちに必要だったのは「日本語を日本語に言い換える力」でした。それを箇条書きにすると以下のようになります。

１　頭に浮かんだ複文を明快で分かりやすい単文に言い換える。

２　言い換えられた単文を筋道が通った日本語になるように論理的な接続語でつなぐ。

３　日本語の単文を基本型「センセン(マル)」に分析し、それを英語の基本型「セン(マル)センセン」に並べ替える。

今までにやってきた英訳の作業は、既に皆さんが体験されたように、上記の三つに尽きるのです。これさえできれば、基本型「セン(マル)センセン」の各々に英語の単語を当てはめるだけです。

もし、うまく当てはまる英単語が思い浮かばない時は、日本語の方を別の言い方で表現できないかを考えれば、ほとんどの場合、解決できました。これも、これまでの作業で体験されたとおりです。

しかしそれでも、「自分の語彙力が貧弱で、いくら日本語を言い換えても、ふさわしい英語が思い浮かばない。だからやはり英語は語彙力がすべてだ。」と不満をこぼされる方がいるかもしれません。

ところで前の章で「語彙をどのように蓄積するかは、章を改めて述べたい」と書きましたので、ここで若干その点について述べて、この章を閉じたいと思います。

「英語ができるようになるためには先ず語彙(ごい)力・熟語力が必要」とよく言われます。これはもちろん間違いではありません。しかし英語学習の大半を単語や熟語を覚えることに費やすことほど無駄なことはありません。私自身にしても高校受験や大学受験のほとんどを単語・熟語の暗記に費やした苦い経験を持っています。しかも、それでいて英語力がついたかというと単に英語が嫌いになっただけだったのです。

ですから私は大学受験を理科系にし科学史を専攻したのです。暗記を余り必要としない学問だと思ったからです。でも私はいま英語教育を専門とした職業に就(つ)いています。そして少しは英語を使えるようになりました。英語教師になってからも単語・熟語を暗記しようと思ったことはありません。そんなことをしようと思ったとたんに学習意欲が減退し学習が持続しないからです。

では、どのように語彙(ごい)力を蓄積しているかというと、知りたいと思う情報を英語で読んでいるだけなのです。日本語でも同じですが、語彙の蓄積は文字を通しておこなうのが最も効率的です。もちろん会話の中でも語彙を蓄積することはできますが、量的には限られたものです。ですから音声訓練は別として、語彙の蓄積だけを考えれば、読むのが一番の近道です。

しかし義務としての英語学習、義務としての読書は楽しくありません。ですから決して持続しません。持続しないものは成功しないのです。だから、自分の知りたいと思うこと、読んで楽しい・面白い・知的興奮をおぼえると思うものを読むのが、持続的学習の秘訣です。こうして量を読んでいくうちに語彙は蓄積します。蓄積した語彙をたまに使ってみれば定着が確実になります。

外国語学習というものは一朝一夕(いっちょういっせき)には成功しません。これは母語の学習を考えれば直(す)ぐに分かることです。幼児が母語を獲得するには毎日、母親や家庭の中で四六時中、母語を聞きながら育ちます。また、それだけでは足りないからこそ、小学校で読み書きを正式に学習するようになるのです。その小学校の教育だけでも、６年間の毎日を日本語の文字学習に費やしています。

しかし、私たちが外国語学習で費やしている時間はどれだけでしょうか。しばしば「英語を中学・高校で６年間も習っているのに日常会話すらできない」などと言われますが、同じ６年間でも中学校では週３時間しか英語に接する時間がないのです。しかも会話が声高に叫ばれるようになってからは、英語教科書が会話スタイルになって、そこに盛り込まれている語彙数は極端に激減しました。

ですから「６年間も英語学習をしているのに」と言って学校教育の英語指導がよく槍玉にあげら

れるのですが、学校教育だけで外国語が使えるようになるというのは不可能なのです。小学校から音楽教育や美術教育がされていますが、誰もが画家や作曲家になっているわけではありません。それにもかかわらず音楽教師や美術教師は非難されず、英語教師だけが非難されているのは奇妙な現象です。

だからと言って、今までの英語教育や現在の英語教育が良いと言っているわけではありません。改善すべき点は少なくありません。だからこそ私もこの本を書いているのです。しかし、学校教育は学びの基礎を教え、将来も自力で学び続けていくための方法や動機を与えるだけなのです。学校教育は上記の仕事を果たすだけで十分なのです。それ以上のことを学校教育に求めることは「無い物ねだり」です。

では自力で英語学習を続け語彙を蓄積していくためには、どのような学習法があるのでしょうか。英語を読むことが語彙蓄積の最短距離だとすれば、どのような読み方をすれば学習が持続し、語彙が蓄積されていくのでしょうか。「自分の知りたいと思うこと」「読んで楽しい・面白い・知的興奮をおぼえるもの」を読むのが持続的学習の秘訣だとしても、
辞書をくりながらの読書は苦痛でしかないとすれば、他にどんな方法があるのでしょうか。

これらについて私がどうしてきたか。それを本当は述べたかったのですが、一つの章の長さが伸びすぎると、読むのが疲れます。そこで、ひとまず休憩を入れ、章を改めて、私の経験と提言を書きたいと思います。頑張って次章も読んでいただけると有り難いと思います。

では、その語彙力をどうすればつけていくことができるのでしょうか。私は既に「その最も簡単な方法は英語をたくさん読むことだ」と述べてきました。日本語でも語彙を蓄積する方法は「読み」です。国語教育はそのためにあると言ってもよいくらいです。

ですから、英会話を中心に編集し直されている最近の中学英語教科書では、語彙が蓄積されませんので、会話を目指した教科書でありながら、逆に会話力がつかないという奇妙な現象が起きています。新しい教科書で学んだ生徒の英語学力が驚くほど低下していて、高校や大学の先生が悲鳴を上げているほどです。

これは考えてみれば当然のことです。教科書は会話文で一杯ですが、学んだ英語の分量からすると、もとの英語教科書の半分にも満たないのではないでしょうか。なぜなら会話文は一行に一文たらずのことが多く、同じページ数を費やしても、そこに盛り込まれている英文の量は以前と比べれば、激減しているからです。

それでも、学んだ会話のフレーズが頭に残っていて、いざ海外に出かけたときに役に立てばよいのですが、日常的に使わないものは消えていくのが言葉の本質です。海外駐在員の子どもで、親が在米していたときは苦もなく英語を使いこなしていたのに、帰国したら、その英語力を維持するのに苦労している話はよく聞きます。

日常的に生活言語として英語を使っていても、帰国した途端に、その学力（語彙力）は時間の経過とともに確実に消えていくのです。だとしたら、日常的に英語を使う機会のない私たちが、語彙を蓄積するどころか、現在の語彙力すら維持するのが難しいのは、当然のことではないでしょうか。これが、会話中心の学習の、最大の問題です。

というのは、学校で会話中心の英語授業を受けていても、家に戻れば、それを使う機会はほとんどありません。ですから、学校で憶えたはずの単語やフレーズでも消えていくのが当然なのです。まして現在の教科書では、そこに盛り込まれている語彙数が以前と比べて圧倒的に少ないのですから、記憶に残る量は全く悲惨なものになります。

ところが「読み」中心の学習は、会話と違って特に相手を必要としませんから、自分にやる気さえあれば何時(いつ)でも何処(どこ)でも可能です。そして読めば読んだ分だけ語彙は蓄積されていきます。しかも会話の教科書は内容が空疎なものが多いので学習は長続きしませんが、「読み」は、教材を選びさえすれば、読みたくなるものは幾(いく)らでもあります。

しかし問題が一つあります。内容が面白いものは語彙が難しいという点です。しかし、だからといって小学生が読むようなものを英語で読んでも面白くありません。

外国語学習は既に述べたように一朝一夕では効果が現れないのですから、長続きする学習法が必要です。ですから、面白くない教材では学習が持続せず、結局は失敗します。

だからといって、読んで面白いもの、自分の精

神年齢に合ったもの、知的好奇心が掻(か)き立てられるものを読もうとすると、辞書と格闘する時間ばかりが長くなって、「楽しみながら学習を持続させる」という本来の目的が達せられません。ではどうすればよいのでしょうか。

その一つの方法が自分の一番知りたい情報を英語で読むという方法です。しかも辞書を引かないで読む方法です。辞書を繰りながら英文を読もうと思うと、それだけで気が遠くなって学習意欲がわいてこないからです。

そこで最近、私が実践している方法を紹介します。この方法が皆さんのお気に召す学習方法になるかどうかは分かりませんが、一つの参考にはなると思います。それは読みたい英文をパソコンに入れて電子辞書で読む方法です。

最近は電子辞書も発達してきて、「読みたい英文」の「知りたい単語」にマウスのポインターを当てると、瞬時に意味が浮かび出てくる辞書が出現してきました。「ポップアップ方式」と呼ばれています。これだと、英文の全てに単語ヒントが付いているのと同じで、辞書繰りの苦痛なしに英文が読めるようになります。

しかし、このような「ポップアップ方式」の辞書でなくて、必要だと思われる単語のほとんど全てに対して、その意味を予(あらかじ)め英文の下に示してくれる電子辞書もあります。「おまかせ訳ふり」と呼ばれています。
それを図示すると、次のようなものです。

もし難易度の高い語彙だけを表示したいと思えば、そのような設定もできます。また英文の下に表示された意味が文意に合わないと思えば、マウスで別の意味を表示して、もっと適当な意味を探すことできますし、それでも不足なら内蔵されている辞書にまでさかのぼって意味を確認することもできます。

これだとやはり英文の殆(ほとん)ど全てに単語ヒントが付いているのと同じなので、全く辞書繰りの苦痛なしで英文が読めるようになります。しかし、このような「易行道」で本当に語彙力がつくのかと疑問に思われるかも知れません。

が、私に関しては、この電子辞書を愛用していて、最近は紙の辞書を使ったことがありません。また定期的に読む英文といえば、ZNetというインターネットのホームページに載っている言語学者チョムスキーの発言・エッセイだけです。これを「おまかせ訳ふり」で読むのですが、確実に語彙力が増えていくのを実感しています。

昔はチョムスキーのインタビューや講演・エッセイを「おまかせ訳ふり」で読んでいても意味不明の箇所が少なくありませんでした。

このように書くと、上記の電子辞書では、先に述べたとおり、英文の下に訳語が書かれて出てくるのですから、意味が取れない方が不思議だと思われるかも知れませんが、とにかくチョムスキーの言っていることの半分も分からないことがありました。

でも、この辞書を使って読み続けているうちに着実に内容が分かるようになり、今では彼のエッセイをプリントアウトして寝ころんで読んでいても大凡(おおよそ)の主張が掴(つか)めるようになってきています。

もちろん正確に意味を掴(つか)みたいときは電子辞書に戻りますが、数年前と比べると、私の語彙力の差、語彙の蓄積量は歴然としています。

このことを考えると、辞書を片手に、英語の教科書を、砂をかむような思いで読んでいる学習者の苦痛が、私には手に取るように分かります。だから、授業でも「最初から訳文や単語ヒントを補助プリントとして与えながら英文を読ませて何が悪いのか」と何時も不思議に思っていました。

そこで、中学や高校の英語教師に上記の提案をするのですが、最初はなかなか理解してもらえませんでした。それでも最近になって、ようやく私の主催する研究会のメンバーだけは、私の趣旨を理解してくれるようになり、新しい教材づくりに励んでいます。そして生徒からも好評を得ています。

このように書いているうちに、私が何故(なぜ)インターネットのチョムスキー記事しか読まないかが自分でもはっきりしてきました。

書物でチョムスキーの書いたものを読もうとすると、また紙の辞書に戻らなくてはならず、それでは「読む楽しみ」よりも「辞書を繰る苦痛」の方が大きくなって、結局は学習が持続しないのです。

私がチョムスキーを読むのは「学習」という意味もありますが、それよりも、彼の発言を読むことによって自分が日々賢くなっていくことを実感できるからです。

彼の発言を読むたびに、今まで自分が考えても

みなかった視点で世の中を見ることを教えられ、知的興奮を覚(おぼ)えるのです。そしてまた次の記事を読みたくなるのです。

単に「英語学習のため」だけに読むのであれば、私はチョムスキーを読まなかったでしょうし、学習そのものが持続しなかったでしょう。読んで面白いからこそ学習としても持続するのです。

このように書くと、読んで面白いのであれば彼の書籍でもよいではないか、という反論や疑問があるかも知れません。しかし、既に述べたように書籍では普通の辞書に頼らざるを得ません。

というのは、「おまかせ訳ふり」や「ポップアップ」の電子辞書を使う場合、書籍の英文をスキャナで読み取り、それをパソコンに入れてやらないと上記の電子辞書は使えないからです。

こうなると手間暇(てまひま)が面倒なので、結局は読むことを止めてしまうのです。ところがインターネット上の記事はパソコンにすぐ取り込むことができて、上記の電子辞書ですぐ読むことができるのです。

しかし考えてみると、誰でもがパソコンを持っているわけでもありませんし、誰でもがインターネットを駆使できるわけでもありません。

だとすると、「おまかせ訳ふり」や「ポップアップ」辞書を使っているのと同じ感覚で、英文がどんどん読んでいける教材、しかも読んでいて知的興奮や発見がある教材が手元にあれば、当面、パソコンやインターネットは必要ないかも知れません。

実は私が主催する研究会では、そのような教材開発をめざして研究していますし、教材も開発されています。しかしそれは教室で使うことを前提としたプリント教材が殆(ほとん)どです。

ですから、学校の授業用ではなく、成人が自学自習用に使えて、しかも読んで知的興奮や発見がある読み物が必要なのです。それは同時に、「おまかせ訳ふり」や「ポップアップ」辞書を使っているのと同じ感覚で、英文がどんどん読んでいける仕組みになっていなければなりません。

そのような教材を、ぜひ作りたいと思っています。そうすれば、本書で英訳（英会話）の方法を学びながら、同時に上記の教材で楽しみながら語彙を蓄積していくことができるからです。単語集で丸暗記をしながら語彙を蓄積していく方法ほど詰まらないものはありません。

中学や高校で英語教師をしているひとの殆(ほとん)どは、学校時代は英語が好きだったひとです。しかも、そのようなひとは単語集で単語を暗記するのが得意だった人が多いのです。

ですから自分が教師になっても、せっせと単語テストをします。全校一斉の単語テストをして学級毎の平均点を公表し、競争をあおりながらテストを繰り返している学校もあります。

そのような教師や学校は、私のように単語の丸暗記が嫌いで理科系の大学を選んだ生徒の気持ちが分からないようです。

そもそも単語集でスイスイ丸暗記ができるし、そのことが得意で英語が好きになった生徒というのは、生徒の中でも圧倒的少数派ではないでしょうか。しかも、そのようにして英語教師になったひとでも、使わない英語はどんどん消えていくのです。

ですから大学時代に難しい英文を辞書を使いながら読んでいた教師でも、教師になった途端に語彙力が落ちていくこと恐れもあります。特に中学校の英語教師は、使っている教科書の語彙数が少ないので、よほど自己研修していないと語彙力が落ちていきます。

英語を使って仕事をしている英語教師ですら、このような状態なのですから、日常的に英語を使っていないひとが語彙を蓄積していくことは至難の技です。単語集や会話のフレーズ集を丸暗記しても、使わなければ消えていきます。

小さな頃、米国で生まれ自由に英語を使いこなしていた子どもでも、帰国した途端に、着実に英語が消えていくことは既にお話ししたとおりです。ましてや、単語集や会話のフレーズ集で丸暗記した語彙は、入れても入れても増えるどころか減っていくのです。ザルで水を汲んでいるようなものです。

これが外国語として英語を学ぶものの必然なのです。移民として米国に渡り、生活語として英語語彙を蓄積していくのであれば、増えることはあっても減ることはありません。そこが外国語としての英語学習と第二言語としての英語学習の違い

です。

第二言語としての英語学習では、間違った文法が化石化して残ることはありますが、英語を生活語として使っている限り、語彙が増えることはあっても減ることは、まずありません。では、これと似た環境で語彙を蓄積する外国語学習はあるのでしょうか。それが「楽しみながら読む」英語学習なのです。

最近ではテレビやラジオで英会話番組が溢(あふ)れています。また市販された英会話の音声テープやCDも少なくありません。ですから、こういう教材を使って日常的に語彙を蓄積していく方法も考えられないわけではありません。

しかし、その音声教材を聞いていても意味が分からなければ、やはり文字で確認しなければなりません。だとすれば、音声訓練のために上記の教材を使う意味はあっても語彙蓄積の方法としては、やはり欠点があるといえます。しかも、このような教材を使い続けるためには余程の意思がなければ長続きしません。

何度も言いますが、「学習のための学習」は特別な動機や強い意志がない限り持続しません。よく「せめて日常会話ぐらいは出来るようになりたい」という声を耳にしますが、そんな程度の動機では「学習のための学習」は持続できません。それほど外国語学習は時間がかかるのです。

ですから、「楽しみながら持続できる学習」が最良の学習法なのです。だからこそ、楽しみながら語彙を蓄積する方法として「知りたいことを英語で読むこと」を提案しているのです。それが私の場合、チョムスキーだったし、電子辞書だったのです。

もちろん人によって「知りたいこと」は違います。私の家内は「園芸」が好きですから、自分の家の庭造りも兼ねて、英国王立園芸協会が発行している『GARDEN』という雑誌を毎号、英国から送ってもらって読んでいます。最初は写真だけとか、写真の説明文だけを眺めていたようですが、最近は本文も少し読めるようになったと言って喜んでいます。

「大学も出ていないのに、英語がよくできるロックシンガー」という話もよく耳にしますが、これも事情は同じです。楽しみながら追求したからこそ持続することができ、語彙も蓄積したのではないでしょうか。

しかし、だからといって単語集や会話のフレーズ集を全面否定するつもりはありません。楽しみながら蓄積したものを整理するのに役立つことがあるからです。特に語源・接辞について説明してあるものが語彙の蓄積に役立つように思います。

というのは、留学生から「海」という文字の中には「母」があると言われて驚かされたことがあるからです。考えてみると、「海」という文字には「水」を表す「さんずいへん」があり、しかも「海」は原始生命を産み出す「母」なる「水」なのでした。

これと同じようなことは英語の単語にも多くあります。

音節数の多い単語、難しいと言われている単語ほど、語源や接頭辞・接尾辞を考えながら分析していくと、意味が明瞭に見えてくることが少なくないからです。ですから、このようなことを説明してある単語集や、そのような観点で編集してある単語集は、語彙の蓄積に大きく役立つように思うのです。

しかし、このような単語集が役立つのは、学習者に一定量の語彙が蓄積されていることが必要です。そのような条件なしに上記のような単語集を使っても、今までに蓄積してきた語彙の整理や今後の語彙蓄積の土台作りには役立ちません。ゼロから覚えなければならないことの多さに圧倒され英語嫌いになる恐れがあるからです。

さて英訳（英会話）のためには「日本語を日本語に言い換えるちから」が重要だということを話しているうちに、いつのまにか英語の語彙をいかに蓄積するかの話題に移ってしまいました。

しかし、ここでもうひとつ確認しておきたいことがあります。それは英語を聞く力のことです。というのは、相手の言っていることが分からなければ会話は持続しないからです。

自分の言いたいことは頭の中で英作文しながらゆっくり話せば大抵のことは通じるものですが、問題は相手の言っていることが分からなければ会話は持続しないということです。

では、どうすれば相手の言っていることが分かるようになるのでしょうか。それについても書き

たいことは一杯あるのですが、予定の分量を既に越えているので、別の機会にしたいと思います。

本シリーズの一貫として音声編も企画されているそうなので、その巻でゆっくり私見を展開できるものと信じています。ご期待いただければ幸いです。

補章 2 イソップ寓話の読み方・考え方

以上で第１部「理論編」を終わり、第２部「実践編」に入るわけですが、私は本書「序文」で次のように書きました。

> 本格的に英語学習を始める中学生ですら国語教科書で読んでいる内容は夏目漱石や芥川龍之介など極めて高度な内容です。ところが英語学習になったとたんに小学生の内容になってしまったのでは学習意欲が半減します。最初はゲーム感覚で楽しんでいたとしても、そのような学習は決して持続しません。だとしたら、成人の場合、なおさらのことです。
>
> その点、イソップ物語は既に述べたように一つ一つが深い内容を持ち、大人が読んでも飽きさせない魅力を備えています。それどころか大人が読んで初めてイソップが意図したことを理解できると言っても良いくらいです。しかも、長さも作文練習に手頃です。いくら内容があっても余りにも長い教材では、英語の作文練習としては「苦行道」に転化してしまうからです。

では、今まで英訳教材に使ってきたイソップ寓話「羊飼いの悪戯」には、どんな意味があったのでしょうか。まず、その日本語版を下に再録します。

＜むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々(たびたび)同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして本当に狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。＞

既に紹介したように、この日本語版は岩波少年文庫『イソップのお話』を英訳しやすいように書き直したものでした。しかし次の日本語原版を見ていただければお分かりのように内容の「幹」は全くその通りに生かされていると思います。

＜羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。「助けて。狼がきた。」村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。しばらくして、狼がきたので、子供は、「来てください。狼だ。」と、叫びましたが、誰もそれを信用して助けに駆けつける者はありませんでした。そこで狼は、安心して、楽に羊をみんな殺してしまいました。＞

では、この寓話の作者イソップは、この話を通じて何を皆に訴えたかったのでしょうか。単に「嘘つきはいけません」というお説教なのでしょうか。

確かに、そのような「お説教」も、この話の一部だと思います。その証拠に上記の少年文庫版には、この話の題名として「うそつきの子ども」という題名が付けられていて、上記の和訳の最後に次のような一文が加えられています。

「うそつきは、ときどきほんとうのことをいっても、人が信用しないようになります。」

このようにイソップ寓話には、話の最後に「まとめの教訓」が付け加えられているのが普通です。しかし本書では、その「まとめ」は全て省くことにしました。というのは、各話からどのような教訓を引き出すかは、読み手に任せた方がよいと思ったからです。

実はイソップの研究者によると、この最後に付けられた「まとめ」「教訓」はイソップ自身が付けたものというよりも、後世にイソップ寓話の編者が自分の判断で付け加えたものだそうです。だとすると、なおさら、その「教訓」「お説教」を押しつけるのではなく、読み手に任せた方が良いのではないかと思うのです。

では、この話は単に「うそつきはいけない」というお説教でないとすれば、何を訴えているのでしょうか。そこで上記の「まとめ」「教訓」をもう一度読み直してみると、「ときどきほんとうのことをいっても、人が信用しないようになります」と書いてあって、「うそつきはいけない」ことの

理由・根拠が書いてあることが分かります。

しかし、「嘘をつくひと」は理由があって意図的に嘘をつくのですから、実は嘘つきに「嘘をついてはいけません」と言ってもあまり意味がないことになります。たとえば、アメリカは最近、イギリス軍とともにイラクに侵攻しましたが、そのときの口実が「フセインは裏でビンラディンと結びついている」「大量破壊兵器がイラクにある」からという理由でした。

ところが、CIAですらフセインとビンラディンの結びつきを否定していますし、今ではイギリス人の大半が「あれは嘘だった」と信じていますし、アメリカ人でも元財務長官オニール氏や映画監督マイケル・ムーア氏のように、「あれは嘘だった。911事件の以前からイラク侵攻は計画されていた。」と主張する人が出始めています。そして実際に大量破壊兵器は未だに発見されていません。

実を言うと、国連の大量破壊兵器を査察する仕事に携わり、その先頭に立ってきたスコット・リッター氏（アメリカ人）は開戦前から「大量破壊兵器は既に大半が査察の過程で廃棄処分され、使い物になるものは残っていない。」と証言しているのです。にもかかわらず、私たち日本人の大半はイラクに大量破壊兵器があるものと信じていたのではないでしょうか。

このことを考えると、単に「嘘つきはいけない」と言っても嘘つきには余り抑止効果はないのではないでしょうか。そのことはイラク侵攻の次の理由として「イラクに民主主義をもたらすため」という口実が持ち出されていることでも明らかです。というのは、「独裁政権を倒し、民主主義を回復するため」というのであれば、それ以前に倒さなければならない政権は周りに沢山あったからです。

たとえば、パキスタンは大量破壊兵器＝核兵器を持ち、指導者はクーデタによって政権を獲得した人物です。しかも、911事件当時もイラク侵攻当時も、公正な選挙も実施しないで反対勢力を弾圧し政権を握っていましたが、アメリカによる打倒や転覆の対象ではありませんでした。国連決議を何十年も踏みにじり、パレスチナの占領・破壊と入植地拡大を続けるイスラエルも転覆や爆撃の対象にはなっていません。

ですから「イラクに民主主義をもたらすため」というのも実は嘘だということが分かるのですが、その嘘つき＝確信犯に「うそをつくな」と言っても余り意味がないことは、上記の例でよく分かるのではないでしょうか。イソップは果たして上記の寓話でその程度のお説教しか言っていないのでしょうか。そこで、もう一度上記の寓話を読み直してみます。すると次の一文が目に入ります。

＜子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。＞

つまり、嘘つきの子どもよりも「嘘をつかれた村人が如何（いか）に早く嘘に気づくか」が問題なのです。この話では「度々そうしたものですから」と、数度の嘘つきで村人がその嘘に気づいたことになっていますが、村人の賢さ如何（いかん）によっては、嘘がまだまだ続けられ、村人の馳せ参じる回数がまだ増え続けた可能性があるわけです。では、私たちはどのように賢くなれば、このような確信犯の嘘に対処できるのでしょうか。

上記のイソップをこのように読んでくると、従来の「うそつきはいけない」という読み方がいかに皮相かが良く分かっていただけたのではないかと思います。つまり、「嘘をつく側」から「嘘をつかれる側」に視点を移しただけで、ものごとの見方が全く違ってくるのです。したがって、上記の寓話に自分勝手な教訓を最後に付け加えるのは逆に読み手の思考を縛ってしまうことになりかねません。

ですから本書では最後の教訓を省き、読みの「深さ」「広がり」を読み手に任せようとしたのでした。また、それがイソップの本旨にも沿う措置ではないかと思うのです。このように考えると、本当は「うそつきの少年」という題名にも問題があることが分かります。というのは、この題名そのものが、「うそつきはいけない」という教訓を引き出すように設定されているとも考えられるからです。

では、この寓話の題名としては、どんなものがふさわしいのでしょうか。そこで念のために他の本を調べてみると、岩波文庫版では「羊飼いの悪戯（いたずら）」、中公文庫では「悪ふざけをする少年」となっていますし、英語版の老舗（しにせ）であるPenguin ClassicsではThe Joking Shepherd、Puffin Claasicsでは<u>Crying Wolf Too Much</u>となっていました。この方が思考を誘導しないという点で

「うそつきの子ども」よりは、良いのではないでしょうか。

とは言っても、何も考えるヒントがないと思考が拡散して「深まり」も「広がり」も出てこない可能性があります。上記の寓話も、最後の教訓を省き、単に「この寓話は何を読み手に訴えていると思いますか」という設問だけでは、「うそつきはいけない」という平凡な答えしか出てこず、思考が揺さぶられる「知的快感」を味わうことができないのではないでしょうか。

私が尊敬する有名な国語教育の実践家に大西忠治（故人）という先生がいました。彼は教師の発問を「ゆれる発問」「ゆれない発問」と大きく二つにわけ、次のように言っています。

＜AかBかを問うような「ほとんど揺れない」発問は、思考を深めないが、他方、漠然と意見を言わせような「ゆれすぎる」発問も、思考を拡散・混乱させる。＞

では、どのような発問が思考を活性化させるのでしょうか。その点で参考になるのが、板倉聖宣さんのやり方です。板倉さんは理科教育で有名な仮説実験授業の提唱者です。仮説実験授業では必ず「授業書」というものを使いますが、その授業書は「問題」－「予想」－「討論」－「実験」という手順で行われます。これは仮説を実験で検証しながら科学が成立していく過程を授業化したものと言えます。

この授業書で特にユニークなのが、クイズの「三択問題」や「四択問題」と同じように、「予想」が必ず「多肢選択」になっていることです。こうして「揺れすぎる発問」の「揺れの度合い」を調節しようとしているわけです。選択肢の数や難易度を変えることによって「揺れの度合い」を自由に調節できるからです。ですから、選択問題は一見すると、作るのは簡単そうですが、「揺れを調節し、思考を最も活性化させる選択問題」を作るのは、実は大変な試行錯誤を要求されるのです。

では、この「羊飼いの悪戯（いたずら）」では、どんな「問題」と「予想」（選択肢）を付ければよいでしょうか。簡単に「この話は何を訴えていますか」という問題にしたとしても、次にどんな選択肢を用意すれば思考が揺さぶられて活性化するのでしょうか。自分に「嘘つきは良くない」という読み方しかできなければ、問題を作りようがないでしょう。このように考えてくると、選択問題もそれほど簡単ではないことがよく分かっていただけると思います。

そこで問題を少し変えてみます。たとえば「この話は何を訴えてると思いますか。『嘘をつく側』と『嘘をつかれる側』の二つの視点から考えてみましょう。」というように、発問を少し具体化して、揺れの度合いを小さくしてみたらどうでしょうか。

しかし、この寓話は「嘘をついてはいけない」ということを子どもに教えるためのものだと思い込んでいた人にとっては、この発問は逆に揺れすぎる発問で、かえって何を答えて良いか分からなくなるかも知れません。

では「この話は何を訴えていますか。次の選択肢から選びなさい。」という問題が与えられ、選択肢として例えば次のようなものが与えられていたらどうでしょうか。

A　嘘をつくことは良くない。
B　直ぐにバレルような嘘をつくことはよくない。
C　嘘をついてもよいが、ばれないうちに止めるべきだ。
D　嘘をつくのは悪いが、すぐに騙（だま）される方がもっと悪い。
E　その他

このような選択肢だと、確かに視点が明確になり、思考の揺れは小さくなります。しかしこれだと、ブッシュ大統領に居直りの口実を与えたり、嘘のつきかたを指南しているように受け取られかねません。

でも私は、単に「この話は何を訴えていますか」と問いかけ、「嘘つきは良くない」という答えを引き出すよりは、こちらの方が良い「問い」と「選択肢」だと思うのです。というのは、このような選択肢に反発を感じ、反論を考えるひとが必ず出てくると思うからです。

板倉さんの授業書では、この「予想」の選択肢が「常識をくつがえし、必ず論争をよぶもの」が良い問題だということになっています。そして、

その「予想」が「実験」によって検証され、思いもかけない選択肢が正しいと証明されることによって、真理は必ずしも多数決によるものではなく実験＝事実のみが真理の審判者であることが、生徒に学習されていくのです。

ですから、選択肢に必ず「その他」を入れておくことが大切なのです。こうすることによって、思いもかけない発想が生徒から提起され、論争も活発になり思考も深まっていくからです。こうして生徒たちは、論争の中で新しい発想の面白さを体感し、実験を通じて新しい発見・新しい思考法を身に付けていくことになります。しかし「論争」も「実験」もできない本書の場合は、どうすればよいのでしょうか。

それについても板倉さんは既に解決策を持っています。というのも仮説実験授業は理科教育だけでなく社会科教育の授業書も最近は開発しているからです。社会科の授業書では「問題・予想・討論」までは出来ても「実験」は出来ません。そこで考え出されたのが、「予想」を論争しながら、それを資料＝事実で「検証」していく授業です。その中で通説＝常識だと思われていたことがひっくり返されていく面白さを生徒は味わうことが出来るのです。

だとしたら、同じことがイソップ物語で実現できないのでしょうか。このイソップ物語を教材にして英訳（英会話）の力をつけつつ、同時に、その寓話の読みを通じて、仮説実験授業のような「通説がひっくり返ることの驚き」「考えることの面白さ」を味わう機会をつくれないだろうかと考えたのです。

そこで上記では「羊飼いの悪戯（いたずら）」の通説、すなわち「嘘つきはよくない」を覆（くつがえ）し、思考を活性化させるために上記のような選択肢を考えたのでした。しかし上記の選択肢は「その他」で論争を保証してはいるものの、どちらかというと、やはり「嘘をつく側」を擁護する視点に偏（かたよ）り、どうすれば「嘘をつかれる側」が賢くなれるかという視点が極めて弱いとも言えるのものでした。

しかし、だからといって「騙されないためには嘘を見抜く賢さが必要だ。」といった選択肢を用意しておくことに私は必ずしも賛成ではありません。というのは、そのような選択肢を用意して、それを正しい選択肢として選ばせたとしても、肝心の「騙されない力」が私たちにつく補章は何もないからです。むしろ「嘘をつく側」を擁護する選択肢を多く用意した方が、逆に反発を呼び、思考を活性化させるとも考えられるからです。

そして、もしこれが授業であれば、そのような反発や論争の中から、「どうすれば嘘が見抜けるか」「嘘を真実だと思わせるためにはどのような工夫がされているのか」などの疑問が出され、かってベトナム戦争時には自由な戦場取材が許されたが、今は兵士の死体が国旗に包まれて米国に送り返される映像すら流せない現実（メディア・コントロール）を知ることになるかも知れません。しかし本書では、論争－資料の提示－検証というわけにはいきません。

ですから本書では選択肢にもっと具体的事実を書き込んで、現在でもイソップ寓話がどのように生きているかを実感できるようにしたいと考えています。そうすれば、英作文の練習教材として機械的に学んできた寓話の意味が再確認され、次の教材に挑戦しようという意欲にもつながるのではないかと思うのです。というのは、脳生理学によれば、今まで使ってきたのと全く違う神経回路に刺激を与えることによって頭脳をリフレッシュさせることが出来るそうですから。

そこで、いよいよ第1部「理論編」から第2部「実践編」の飛躍です。イソップの世界を楽しみながら英訳（英会話）の力をグングン伸ばしていただきたいと思います。未来はあなたのものです。頑張ってください。